

それでは、今朝のテーマは偶像。偶像礼拝についてでありますけれども、敢えてこのメッセージのタイトルをつけるとするならば、『アイドル・ストップ』というタイトルにしたいと思います。アイドルというのは勿論英語です。偶像のことを英語で「アイドル」と言うんですけれども、ただ日本語で、和製英語でもうアイドルと言えば、アイドル歌手とか、アイドル・グループとか、皆さんのそれぞれアイドルというものがあると思います。皆さんの世代のことはよく分かりませんが、美空ひばりとか、吉永小百合とか、今の時代だったら AKB48 とか。私もよく分かりませんが、そういう名前をよく聞きます。いろいろなアイドル、アイドル・グループ、それらは正に偶像化されたものを表すわけです。最も愛するものであり、最も大事なものであり、欠かせないもの、頼りにするもの、それらが皆偶像になってしまうわけですけれども、その偶像を英語で「アイドル」と言っ、『アイドル・ストップ』というのは、「アイドリング・ストップ」という言葉がありますが、これも和製英語です。本当は英語では「アイドリング・ストップ」なんていう言葉はありませんが、“no idling”と英語で単純に言うんですが、「アイドリング・ストップ」と言えば、それは車で無駄に吹かさないこと。駐車しているのにいつまでもエンジンを切らずに、エンジンをかけたまま、どんどんガソリンは消費されていくのであります。それを「アイドリング」というわけです。「アイドリング」というのはそもそもが偶像という言葉から来ているんですが、その偶像・アイドルは原意を辿ればそれは、「無駄である」ということです。「アイドリング」をしないというのは、無駄なことはしない。勿論「アイドリング」は無駄なだけではありません。ガソリンをただ無駄に使ってしまうだけではありません。環境にも悪いということで、「アイドリング・ストップ」ということがよく運動としてキャンペーンになるわけですが、他にも夜中だったら騒音があるから「アイドリング・ストップ」しましょうと。勿論自分の財布も、ガソリンがどんどん高騰していますから、無駄遣いしたいためには「アイドリング・ストップ」することによって懐も守ることが出来るということで、いろんな意味でアイドリングは無駄であるということが指摘されるんですが、でもここでもっと無駄なことがあるということを今朝伝えたいと思います。それはそのアイドリングの語源であるアイドル、これは全く無駄なものである。そのアイドルに、その偶像に信頼するということ、これほど無駄なことはない。これほどの浪費はないということ。そのことをまた聖書のそこかしこの聖句からも皆さんにお分かちしていきたいと思います。

まず初めに、そこかしこを見る前に基調となる聖句を、主題の聖句を皆さんに聞いて頂きたいと思います。ローマ 1:20~25 です。これは前回の午前礼拝でテーマとした進化論、その進化論を語る際にもこの箇所を開きました。キリスト教のベーシックシリーズで前回は進化論について語ったんですが、同じ箇所から今朝は偶像について、偶像礼拝について語りたと思います。そこをお読みします。『²⁰ 神の、目に見えない本性、すなわち神の永遠の力と神性は、世界の創造された時からこのかた、被造物によって知られ、はっきりと認められるのであって、彼らに弁解の余地はないのです。²¹ それゆえ、彼らは神を知っていながら、その神を神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その無知な心は暗くなりました。²² 彼らは、自分では知者であると言いながら、愚かな者となり、²³ 不滅の神の御栄えを、滅ぶべき人間や、鳥、獣、はうもののかたち²⁴ に似た物と代えてしまいました。²⁴ それゆえ、神は、彼ら²⁵ をその心の欲望のままに汚れに引き渡され、そのために彼らは、互いにそのからだをはずかしめるようになりました。²⁵ それは、彼らが神の真理を偽りと取り換え、造り主の代わりに造られた物を拝み、これに仕えたからです。造り主こそ、とこしえにほめたたえられる方です。アーメン。』偶像について、偶像礼拝についてこの箇所は触れております。言及しておりますが、偶像という漢字もイメージして頂くとお分かりの通り、“偶”も“像”も両方とも人が造った形ある象のことを指します。ですから、偶像というとそのように目に見えるものをまずは連想すると思います。アイドル歌手にしても、アイドル・グループにしても、目に見えるもの、それを偶像化するわけです。それを自分の神とするわけです。

聖書の中に、それら目に見える偶像がどのようなものか、その実体について、正体について暴露する聖句が沢山

ありますので、そのいくつかを皆さんにご紹介します。読み上げていきますので、聖書の箇所だけで結構ですのでメモしておいて下さい。まず十戒という言葉は、皆さんモーセの十戒、よく知っていると思います。出エジプト記 20:3～4 にこうあります。第 1 戒と第 2 戒です。『³あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があつてはならない。⁴あなたは、自分のために、偶像を造ってはならない。上の天にあるものでも、下の地にあるものでも、地の下の水の中にあるものでも、どんな形をも造ってはならない。』この言葉はあまりにも有名です。天地万物を造られた創造主以外には、神を持ってはいけません。自分のために偶像を造ってはならない。偶像というのは、基本的には自分のために造るものです。他の誰かのために造るものではありません。でも、私たちの信じる聖書の神は、私たちのために存在している神ではありません。この神は生きています。人格のある方です。人格があるので機械ではありません。ものではないのです。人間関係も考えて頂ければ分かりやすいと思います。夫婦でも、親子でも、友人関係でも、上司と部下の関係でも、ありとあらゆる人間関係において共通していることですが、相手は自分の思うようには動いてくれない。自分の願い通りにはしてくれない。当然です。相手にも人格があるわけです。相手にも願望があるわけです。相手にも意思があるわけです。ですから、自分の言うことを聞いてくれるロボットのようにいつも動いてくれるわけではないわけです。何でもかんでも自分の言うことを聞いてくれる存在ではないわけです。でも、それをつい忘れます。長年夫婦生活を送ると、もう当然相手が自分の言うことを聞くものだとか、自分の願いを汲むものだと思っているかもしれませんけれども、それぞれ違うわけです。男女にも違いがありますし、子供同士でも違います。自分の子供と思うかもしれませんが、子供にも人格があるんです。「なぜ俺の言うことを聞かないのか。なぜ私の言うことを聞かないのか。子供のくせに、養ってやっているだろう。」と、そう思うかもしれませんが、でも子供にも人格があるのであります。ですから、必ずしも親の言う通り、願い通りに子供が動くわけではありません。無理矢理聞かせるという事は出来ないわけです。ロボットではないですから。プログラミングなんか出来ないのであります。

でも、偶像に関してはどうでしょうか。偶像は自分のために造るものです。自分の言うことを聞かせるために造るんです。偶像には命がありません。人格がありません。ですから、自分の思うように、願うように造り上げることが出来るのであります。ただ、忘れてはいけない事は、それらには命がないということです。命がない、力がない、頼りにはならないということです。ただの気休めでしかないわけです。ただのお人形です。そうしたものに私たちは願掛けをしたり、「何とかして下さいよ。お願いしますよ。」お布施や、賽銭や、願掛けや、お百度参りや、いろいろなことをして「これだけ頑張っているんですから、認めて下さい。これだけ犠牲を払っているんですから、何とか後生ですから私の願いを、夢を叶えて下さい。どうか志望校に合格できますように。」とか、「どうか赤ちゃんが無事に生まれますように。」とか、交通安全、家内安全、無病息災、いろんなことを願うわけです。自分のためにそれらの偶像は、人間が造ったのであります。その一方で私たちの信じる神は、そうではない。この大きな違いを知って頂きたいと思います。

他にも、偶像の実体として読みたい箇所があります。エレミヤ 10:2～5。『²主はこう仰せられる。「異邦人の道を見習うな。(異邦人というのは、異教徒のことです。偶像礼拝者たちのことです。) 天のしるしにおののくな。異邦人がそれらにおののいていても。³国々の民のならわしはむなしからだ。それは、林から切り出された木、木工が、なたで造った物にすぎない。(これは御神木ですとか、御柱ですと言っても、それはただ木こりが林に行って木を切ってきたに過ぎないと。また、)⁴それは銀と金で飾られ、釘や、槌で、動かないように打ちつけられる。⁵それは、きゅうり畑のかかしのようで、ものも言えず、歩けないので、いちいち運んでやらなければならない。そんな物を恐れるな。わざわざいも幸いも下せないからだ。」』バチが当たるんじゃないとか、そんなことを恐れてはいけません。ただの木です。ただの石です。ただの貴金属です。ただの紙切れです。それらは全て人間が形造ったものであります。

そしてイザヤ 40:18～20 にこうあります。『¹⁸あなたがたは、神をだれになぞらえ、神をどんな似姿に似せようとするのか。¹⁹鋳物師は偶像を鋳て造り、金細工人はそれに金をかぶせ、銀の鎖を作る。²⁰貧しい者は、奉納物として、朽ちない木を選び、巧みな細工人を捜して、動かない偶像を据える。』偶像は身動きひとつとれないんです。人間が動かしてあげなければいけない。人間が体を拭いてあげなければいけない。メンテナンスをしてあげなければい

けない。自由に歩くことも出来ない。実に不自由な存在です。

次にイザヤ 44 章 9～20 もお読みします。『⁹偶像を造る者はみな、むなししい。(例外なく全員誰でも偶像を造るものはみな、むなししい。)彼らの慕うものは何の役にも立たない。(アイドルですから。まさに偶像礼拝はアイドルングです。無駄なことです。ただ環境を悪くするだけではありません。周囲を悪くするだけではありません。アイドルングと同じでお金もかかります。無駄遣いすることになります。アイドルングと同じで騒音や迷惑もかけます。何の役にも立たない。)彼らの仕えるものは、見ることもできず、知ることもできない。彼らはただ恥を見るだけだ。¹⁰ だれが、いったい、何の役にも立たない神を造り、偶像を鑄たのだろうか。¹¹ 見よ。その信徒たちはみな、恥を見る。それを細工した者が人間にすぎないからだ。彼らはみな集まり、立つがよい。彼らはおののいて共に恥を見る。¹² 鉄で細工する者はなたを使い、炭火の上で細工し、金槌でこれを形造り、力ある腕でそれを造る。彼も腹がすくと力がなくなり、水を飲まないで疲れてしまう。¹³ 木で細工する者は、測りなわで測り、朱で輪郭をとり、かんなで削り、コンパスで線を引き、人の形に造り、人間の美しい姿に仕上げ、神殿に安置する。¹⁴ 彼は杉の木を切り、あるいはうばめがしや檜の木を選んで、林の木の中で自分のために育てる。また、月桂樹を植えると、大雨が育てる。¹⁵ それは人間のたきぎになり、人はそのいくらかを取って暖まり、また、これを燃やしてパンを焼く。また、これで神を造って拝み、それを偶像に仕立てて、これにひれ伏す。¹⁶ その半分は火に燃やし、その半分で肉を食べ、あぶり肉をあぶって満腹する。また、暖まって、『ああ、暖まった。熱くなった。』と言う。¹⁷ その残り神を造り、自分の偶像とし、それにひれ伏して拝み、それに祈って『私を救ってください。あなたは私の神だから。』と言う。¹⁸ 彼らは知りもせず、悟りもしない。彼の目は固くふさがって見ることもできず、彼らの心もふさがって悟ることもできない。¹⁹ 彼らは考えてもみず、知識も英知もないので、『私は、その半分以上を火に燃やし、その炭火でパンを焼き、肉をあぶって食べた。その残り忌みきらうべき物を造り、木の切れ端の前にひれ伏すのだろうか。』とさえ言わない。²⁰ 灰にあこがれる者の心は欺かれ、惑わされて、自分を救い出すことができず、『私の右の手には偽りがないのだろうか。』とさえ言わない。』偶像礼拝に陥ると、まともに冷静に自分たちが考えていること、やっていることが、まったく見えなくなってしまうのであります。でも、このように聖書の中でそれが明らかな言葉に文字化されると、「この年末年始、神社仏閣に参拝に行きました。初詣に行きました。何かあれば事ある度にそういった神社仏閣に行きます。」と。でも、それは一体どういう意味のあることを、どういう価値のある事をしているのか。「何も考えずに昔からやっていることだから。これは伝統だから。これは日本人だから。」というふうに、何も考えずにそれが当たり前のように、それが本当は愚かしく虚しい、何の役にも立たないことなのに、ただの時間の無駄、お金の無駄であるのに、人間はそれを考えずにして、自分たちは何でも分かっているつもりでいるわけです。聖書がそのことを暴いています。

また、詩篇 154:4～8。『⁴彼らの偶像は銀や金で、人の手のわざである。⁵口があっても語れず、目があっても見えない。⁶耳があっても聞こえず、鼻があってもかげない。⁷手があってもさわれず、足があっても歩けない。のどがあっても声をたてることもできない。⁸これを造る者も、これに信頼する者もみな、これと同じである。』アイドル歌手や、アイドル・グループのファンの人たちを見て下さい。彼らもだんだん追っかけをしているうちにアイドルと同じような格好をするようになります。そして、アイドルと同じような価値観を持つようになります。そして、アイドルと同じようなライフ・スタイルを送るようになります。ファッションだけではなくて、その価値観や、またライフ・スタイルまでも真似るようになるんです。それと同じように偶像礼拝もそれを続けているうちに、その偶像を慕い続けているうちに、そのアイドルのファンになっているうちに、だんだんそのアイドル似たものとなるわけです。でも、そのアイドルというものは、その偶像というものは、目があっても見えない。耳があっても聞こえない。鼻があってもかげない。口があっても利けない。足があっても、手があっても動かすことが出来ない。そのような文字通りの木偶像の坊に偶像礼拝者たちも成り下がってしまう、ということがこの箇所にはハッキリと指摘されているのであります。

目に見える偶像が虚しいという事は、ここにいる皆さんはもう十二分に認識されていると思います。パウロがギリシャのアテネの町に入った時、使徒の働き 17:16 というところに『町が偶像でいっぱいなのを見て、心に憤りを感じた。』と彼は言っています。「心に憤りを感じた。」この言葉は、「突然の激しい感情に駆られた。」というふうに訳すこ

とができます。そして、その同じく使徒の働き 17:29 のところに、そこには『神を、人間の技術や工夫で造った金や銀や石などの像と同じものと考えてはいけません。』と、アテネの人たちに語っております。この日本を見る時に、アテネと同じように、またはアテネ以上に沢山の偶像が溢れているということに私たちは気付かなくてはなりません。この国に生まれ、この国に育ち、私たちは偶像が本当に身近で、「神社やお寺が幼い頃からの遊び場でした。何の違和感もなく、むしろ最も身近な、最も近い存在として、もう公園のようなところでした。」とか、児童館のようなところでしたと。別に手を合わせたり、また賽銭をしたり、何ののがめもなく、何の違和感もなく、お祭りにも参加してきて、何も悪いふうには思ったことがない。もう慣れ親しんでいます。それがもう自分の中の一部ですと、そういう認識を多くの日本人は持っているかと思うんですが、パウロはアテネの町に入った時に、偶像がいっぱいなを見て心に憤りを感じた、激しい感情に駆られた、と言ったわけです。それが、本来クリスチャンの感じるべき感情なんです。クリスチャンのとるべきリアクションなんです。にもかかわらず私たちは、日本のこの八百萬の^{やおよろず}800 万以上の神々、これを前にしても、もしかしたら何も感じない。「別に普通です。何の違和感もありません。善光寺、善光寺さんのおかげでこの長野は栄えているんですよ。これがなければ私たちの生活は成り立ちません。ありがたい、ありがたい。どんな宗教でも受け入れてくれる、それが善光寺というところですよ。沢山の観光客も来ますし。うちもそれでお世話になっています。」とか、いろいろな良い思い、好意的な、決して悪くは思わない、そういう感情を皆さんは逆に思ってしまうかもしれません。でも、本来はその多神教の土壌、これを見る時に、この姿を目の当たりにする時、クリスチャンは偶像がいっぱいなを見て憤りを感じなければいけない。あちらこちらにお宮がある。道祖神がある。いろいろな像、仏像や、また様々な人や動物に形どった像が乱立している、林立している、この状況を見て私たちは何も思わない。ただ見て見ぬふり、若しくは意識もせずにただ通り過ぎて、景観の一部として、いつも偶像を見ているのに、運転しながら、散歩しながら。でも、何も感じない。それは一体どうしたことでしょうか。何かがおかしいのだと思います。もう慣れてしまったと言えればそれまでですけれども。でも、おそらくは皆さんの中には、もし忘れてしまって何も感じないという人があるならば、そもそも偶像というものがどういふものかを忘れてしまっている人かと思えます。改めて偶像というものが神にどれほど忌み嫌われるものなのか、もう一度思い起こして頂いて、本来パウロと同じような激しい感情を、憤りを感じなければならぬものだという認識をもう一度持って頂きたいと思えます。真の神を知れば知るほど、この偽りの神々の存在に我慢ならなくなると思えます。それこそまがい物です。模造品です。偽造品です。偽物です。偽ブランドです。騙りです。詐欺師です。そのようなものを見て、私たちは何も感じないのでしょうか。何も感じないならば、やはり私たちの内に何か問題があるということになるかと思えます。

で、偶像の正体についてもう少し追求したいと思うのですが、その本質というものも聖書は暴露しています。偶像の正体・実体については今取り上げた聖句で十分だったかと思いますが、たださらに追求して偶像の本質の部分、それは目に見える偶像ばかりではないということ。目に見えないものが実は目に見えるものにただ具現化されているだけで、偶像化されているだけで、本当のその偶像の元、種と言ってもいいかもしれません、それが聖書でやはり暴露されているので、それらの箇所も皆さんには開いて頂きたいと思えます。冒頭でも開いたローマ 1:24 というところには『心の欲望のままに』という言葉が使われておりました。偶像礼拝にはこの心の欲望というものが絡んできます。心の欲望、これが自分のために偶像を造る引き金となるのであります。その心の欲望をなんとか満たすために、自分はその願望を叶えてくれそうな偶像を造るんです。ですから、志望校にどうしても入学したいと思えば、学問の神を造るんです。どうしても結婚したいと思えば、縁結びの神を造るんです。そうやって自分のために、自分の欲望を満たすために、いろいろな神々をこしらえるのであります。

他にもエゼキエル 14:4 には『心の中に偶像を秘め』という言葉が使われております。心の中に偶像を秘めということは、その偶像は目に見えないものだという事です。目に見えない偶像を誰もが心の中に持っている。別に善光寺に行かなくたって、偶像は人の心の中にあるわけです。

またホセア 13:2 には『自分の考えで偶像を造った。』というフレーズが使われています。偶像は人間の考えで造ったものです。神のアイデアではありません。人間のアイデアです。勝手に造ったものです。

また、ハバクク1:11には『**自分の力を自分の神とする**』という言葉が使われています。自分の力を自分の神とする。それも偶像礼拝の本質であります。結局は、偶像礼拝は自分に関することなんです。自分のためにやることです。その一方で、真の神を礼拝する、真の神礼拝は自分のためではありません。自分に関することではありません。すべては神のためです。すべては神の栄光のためです。全然違うということを知って下さい。

ピリピ 3:19 を開いて見て下さい。『**彼らの最後は滅びです。彼らの神は彼らの欲望であり、彼らの栄光は彼ら自身の恥なのです。彼らの思いは地上のことだけです。**』現世利益だけですと。そういう彼らの神というのは、**彼らの欲望**であるとハッキリ書かれています。欲望というところには、小さな*印が付いていて欄外を見て頂くと、直訳『腹』とあります。彼らの神は腹である。その腹というのはまさに食欲の源を表す、欲の源を表すということで、欲望と意識しているわけです。彼らの神は欲望である、腹である。全く同じ原語がローマ 16:18 にも使われています。『**そういう人たちは、私たちの主キリストに仕えないで、自分の欲に仕えているのです。**』(この「自分の欲」というところにも*印が付いていてやはり欄外には、直訳として『腹』とあります。自分の腹に仕えている。)彼らは、なめらかなことば、へつらいのことばをもって純朴な人たちの心をだましているのです。』偶像礼拝のその本質は、欲です、欲望です、腹です。別の表現では、パウロはコロサイ 3:5 でこう言っています。『**ですから、地上のからだの諸部分、すなわち、不品行、汚れ、情欲、悪い欲、そしてむさぼりを殺してしまいなさい。このむさぼりが、そのまま偶像礼拝なのです。**』むさぼり。食欲、欲望と勿論訳して差し支えない言葉です。ギリシャ語で「プレネクテース」という言葉ですけれども、その「プレネクテース」という言葉は語源を辿ると単純に「いっぱい持つ」という言葉です。いっぱい持つ、沢山持つ。欲張りということです。自分のものではないのに、他人のものまでも欲しがることを、むさぼりと言うわけです。「もっと欲しい。我慢出来ない。満足出来ない。もっとくれろ、もっとくれろ。」と、それが私たちの飽くなき欲望、そしてそれが偶像礼拝の種というものです。元になる部分です。

勿論欲望と言っても全てが悪いものではありません。いろいろな欲があるわけです、欲求があるわけです。食欲とか、性欲とか、睡眠欲とか、皆人間の生命維持には必要なものであって、それらは全て悪いわけではありません。でも、それらが過度になってしまうと、先ほど話した「もっと欲しい。」とか、人のものまでも欲しがるということになりますと、それが問題になって、その自分の欲望を正当化するために、人は偶像を造るのであります。1人の妻では満足出来ない。だから2人でも、3人でも不倫をしたい。沢山の女性と交わりたい。そういう自分の欲望を正当化するために、人はセックスの神を造るわけです。古代においてその神は、その女神は、アシュタロテと呼ばれたわけです。そのようにして、それぞれの飽くなき欲望、それは聖書でハッキリと罪と呼ばれるものですが、それらを罪とはせずに美しく仕立て上げて、そしてまるで神のように神々しいものにして、それを礼賛する。そして正当化する。それが人間のやってきたことであります。勿論神はそのような偶像礼拝を決して快くは思いません。むしろ忌み嫌っているわけです。ですからパウロも沢山の偶像を見て、非常に憤ったわけです。忌み嫌うべきものがこんなに沢山あると。でも、私たちはひよっとしたらそれらを見ても何とも思わないかも知れません。私もそうでした。道祖神を見ても何とも思わなかったわけです。お地蔵さんを見てもなんとも思わなかったんです。「ああ、古くから、昔からある。」でも、それらは元々は男根のシンボルなんです。男性の性器を形どったものです。それが道祖神なんです。道祖神祭りとかあります。道祖神祭りというのは、言い換えれば男根祭りです。男性の性器を礼賛するためのそういうお祭りです。性欲を駆りたてて、そしてそのような不品行の罪を正当化する、礼賛する。それが道祖神信仰であり、道祖神祭りというわけです。それらをただ表立って喧伝していないだけで、それが起源であるわけです。そうしたことを話すときがありませんので、それぞれ身近にある偶像を考えて頂きたいと思います。

そして、他の箇所も読みたいと思いますけれどもエペソ 5:5『**あなたがたがよく見て知っているとおりに、不品行な者や、汚れた者や、むさぼる者——これが偶像礼拝者です。——こういう人はだれも、キリストと神との御国を相続することができません。**』だからパウロは憤ったんです。偶像礼拝をしている者たちが、キリストと神の国を相続することがない。言い換えれば、天国に行けないうで地獄に行くんだと。だからパウロは憤ったわけです。当然の怒りです。当然の感情です。それらの偶像は、私たちが天国に誘うものではないのです。それらの偶像は、むしろ逆に人々を天国で

はなくて地獄に誘うものです。だとするならば、それらは忌み嫌うべきものです。そんなものが近くにあるとか、ましてや自分の家の中にある、とんでもないと思うわけです。「え、あの神棚が。え、あの仏壇が。え、あのお守りが。これは純金で出来ている金の非常に貴重な像なんですよ。ある人から頂いたものなんです。記念でとか、お土産でとか。」でも、それらの偶像は本来どのようなものかを知らなくてははいけませんし、また聖書の中には、これは**申命記 32:17**では『**神ではない悪霊どもに、彼らはいけにえをささげた。それらは彼らの知らなかった神々、近ごろ出てきた新しい神々、先祖が恐れもしなかった神々だ。**』)偶像礼拝の背後には、悪霊が働いているということです。偶像を拝むのは、実は悪霊を拝むものだと、聖書にハッキリ書かれているわけです。

他にも、**詩篇 106:37**にも同じことが書いてあります。(『**彼らは自分たちの息子、娘を悪霊のいけにえとしてささげ、**』)そしてもう1カ所、新約聖書の**第一コリント 10:20~21**(『²⁰いや、彼らのささげる物は、神にではなくて悪霊にささげられている、と言っているのです。私は、あなたがたに悪霊と交わる者になってもらいたくありません。²¹あなたがたが主の杯を飲んだうえ、さらに悪霊の杯を飲むことは、できないことです。主の食卓にあずかったうえ、さらに悪霊の食卓にあずかることはできないことです。』)それらの箇所を見て頂くと、「偶像はただ人が造ったもので木や石や金属、そんなものに過ぎないだろう。だから実体のないものを拝んだって何の意味もないだけで、何の問題もないだろう。」と、そう思うかもしれません。でも実はその偶像の背後には、悪霊が働いていて、それらの偶像には悪霊が住み込む、入り込む、日本語では「依り代」という言葉が使われます。お正月でもいろんな依り代を日本人は飾ります。「お飾り」というものです。お正月だからということで、いろんな飾りを付けるわけですが、その飾りというのは偶像が依り代としてそこに住むための、言わば偶像を迎えるための空間なわけです。そこに目に見えない偽りの神、偽りの霊が住むための依り代のわけです。しめ縄とかいうものも全部そうです。そこに神々が住むわけです。お迎えするためにそういうものを置くわけです。そこに聖書によれば悪霊も住むと。すべての偶像の中に悪霊が住んでいるとは言いません。ただの紙切れ、ただのプラスチックもあるでしょう。ただの棒きれもあるでしょうし、ただの石もあるでしょう。でも、そこには偶像が住む可能性があるということです。だからクリスチャンはそのようなものを家に置きたくないと思うわけですし、そんなお守りなんかポケットに入れたりとか、車の中にぶら下げたりとか、そういうこともしたくないと思うわけです。場合によっては、そこに悪霊が何らかの形で作用する可能性があるからです。そのようなものは、クリスチャンは置きたくない。

なぜ人々の目は見えなくなってしまうのか。なぜそんなことが分からないのか。そこにはやはり悪霊が働いているからです。「そんなものに頭を下げたって何にもならないだろう。そんなことも分からないのか。そこまで愚かなのか。社会的地位もある人が、学歴も高い人が、理性もあるだろうに。なぜそんな偶像に頼るのか。理解に苦しむ。」と思うかもしれませんが、でもそこに悪霊が働いているとしたらどうでしょうか。悪霊が彼らの目を開かないようにしているわけです。偶像礼拝によって、目があっても見えない、そういう偶像に似た者になるという話もしましたけども、聖書によればこの悪霊の頭である悪魔が、サタンが、私たちの目をくらまして、福音の輝きを見せないようにしている。ですから偶像礼拝というのは、軽く見てはいけません。

「もうクリスチャンだから、私はもう偶像礼拝とは何の関係もない。」と思うかもしれませんが、そうとも言えません。聖書の中にはクリスチャンに対しても「**偶像礼拝を避けなさい。**」という命令があります。これは**第一コリント 10:7**そして**14節**。クリスチャンたちに対して、コリントの教会に対してパウロは、「**偶像礼拝を避けなさい。**」と言っています。またパウロだけではなくて、使徒ヨハネも**第一ヨハネ 5:21**もう最後の結びの言葉で『**子どもたちよ。偶像を警戒しなさい。**』と。“子どもたち”と言っているのは、クリスチャンたちのことです。クリスチャンたちに、**偶像に警戒しなさい**と。「いや、クリスチャンはもう偶像なんか信じない。偶像礼拝とは無縁の人たちだ。」と私たちは思うかもしれませんが。「クリスチャンは絶対にお参りなんかしない。お宮とか善光寺に行って参拝なんか絶対にしないんだと分かりきっている。仏式のお葬式に出てクリスチャンが焼香するなんてありえないこと。それは死者を礼拝する事だから。偶像礼拝だから。そんな事はクリスチャンはしないんだと、そんな事は分かっている。絶対に偶像礼拝にクリスチャンは関わることがないと。常識ですよ。」と思うかもしれませんが、でも聖書ではハッキリとそのクリスチャンに対して「**偶像礼拝を避**

けなさい。」とか、「偶像に警戒しなさい。」と。警戒するまでもない、常識で分かっていると、私たちは思うかもしれませんが、でもそれに対してパウロは、またはヨハネは警告を与えているのであります。警告されなければ私たちもまた偶像礼拝に陥る可能性があるから。警戒しなければ私たちもいつの間にか偶像礼拝に取り込まれてしまっているから。勿論お分かりの通り、騙されて善光寺へお参りするなんていうことはありません。でも、偶像礼拝の本質がどういふものかをもう一度思い出して下さい。その本質は欲でした。欲望です。腹です。これらが私たちの偶像になり得る。それらが私たちの神に取って代わるということが言えるわけです。神でないものは全部偶像であります。

宗教改革者のマルティン・ルターは「人間は常に神か、さもなければ偶像を持つ。」と言いました。天地万物、宇宙を造られた神に代わって、人間が自分たちで木や石や金属、そうしたものを加工して神々として偶像化したという話は先程いろいろな聖書の箇所ですんで、そういった自然を崇拜の対象にはしてはいけない事は、もう明らかであります。

アフリカの学者のラクティン・テュースという人がこう言っています。「人が神を知らない事は悪いことであるが、何よりも悪い事は神にあらざるものを神と認めることである。」と言っています。ルターは「人は常に神か偶像か、どちらかを持つ。」どちらも持たないという人はいないわけです。「私は無神論者です。」と言っても、「無宗教者です。」と公言しても、「神か偶像か、どちらかを持つ。」というのがルターの見解です。どっち付かずはありません。どっちかです。

どちらかを選ばなければいけないということの中で、本物の神を選ぶのか、それとも偽りの神々を選ぶのか、私たちに選択の余地が与えられているのですが、本物でない神、これを選ぶとするならば、それほどの悪はないと先程アフリカの学者のラクティン・テュースという人が言ったわけです。「何よりも悪い事は、神でないものを神とすることである。」と。自分の母親にそっぽを向いて、他の女性を「私のお母さん。」と言うのと一緒です。自分の父親に養ってもらっているのに、その辺の通りすがりのおじさんに「いつも僕のために働いてくれてありがとう。いつもお小遣いをくれてありがとう。」そんな姿を見たら、親としてどうでしょうか。神様の心を皆さんもここで知って頂きたいと思います。あなたを造られた神様、あなたに全てを与えてくださっている神様。「自然の恵み」という言葉を使いますが、その自然をも神は造ったわけですから、すべては神の恵みです。こうして息をしているのも、神の恵みです。なのに私たちはその神を忘れて、神あらざるものを神として、そしてそれらを信奉する。それらを頼りにする。あつてはいけないことです。やっではいけないことです。

そして私たちは自分の願いを絶対視して、絶対化して、そして偶像を造り上げていくのであります。いろんな欲望、願望、希望、夢と言うかもしれません。いろんな表現があるかもしれませんが、でもとどの詰まるところは自分中心の願いです。自分さえよければ良いという、その思いであります。「今日はいい天気。」自分勝手です。何がいい天気なんでしょうか。晴れているのがいい天気なのか。雨を必要としている人たちもあるわけです。「雨が降らなくてこれは悪い天気だ。」晴天でも悪い天気だと思える人もあるわけです。「雪が降って、ああ最悪だ。雪が降っちゃった。」でも雪が降らなければ、生きていけない、生活出来ない人もあるわけです。私たちは実に身勝手です。明日天気になるように。明日雪が降るように。自分中心です。自分の願いさえ通れば、それで満足、それで幸せだと、そう思い込むわけです。それが偶像礼拝というものです。自分さえ合格できればそれで良い。「志望校に合格します。」でも自分が合格するという事は、他の誰かが不合格になるということでもあるわけです。でも、そうやって私たちは身勝手です。「絶対にレギュラーになるんです。」でも、あなたがレギュラーになるということは、誰かがベンチ入り、誰かがベンチ外、若しくは補欠。レギュラーとして選ばれるのは限られた人だからであります。でも、私たちは自分さえ良ければ、自分さえ。自分の願いばかりを押し通そうとします。願掛けします。「お願いします。」一生懸命高額の賽銭、お布施を支払って。自己中心です。実に身勝手です。実にわがままです。実に勝手気ままです。ご都合主義であります。

「ご利益」という言葉がありますけれども、その「ご利益」という言葉は勿論あまり良い言い方では使われないわけですが、実際に利益と書いて利益と仏教では読むわけですが、その本来の仏教の立場から「ご利益」というものはどういふものかを皆さんに少し分かちたいと思います。「ご利益」と言うと仏様とか神様全般、神仏全般ですけ

れども、お参りしてその結果として病気が治るとか、商売が繁盛するとか、そういったものを皆さん連想すると思います。それがご利益であると。しかし、これは実は本来のご利益ではないと、仏教の立場ではそのように説くそうです。それは結果論だけ見て、そのプロローグとエピローグだけを見ているだけです。その真ん中のプロセス、肝心なその真ん中の部分が抜け落ちているのだと、仏教側の人たちは指摘するわけであります。ご利益はためになる事、他人を益する事、仏様から与えられる恵み、といった意味で、善行の結果得られるものだと説かれるそうです。善行の結果、しかもそれは自分の益になるとは限らないわけです。他人の益になることもまたご利益だと言うわけです。仏様の正しい教えを守り、それを実践することで、自分以外の人にプラスになるような働きをすることで、自らも仏様の恵みを与えられるからと。例えば参拝の折にあげのお賽銭は、皆が気持ちよく参拝出来る環境が維持されることをお願い、浄財を供えるということです。この善行の結果として、自分自身の願いも叶うように仏様が恵みを与えてくれることになります。浄財とは正しい行いで得たお金で、自分以外の人のためになる使い方をしたお金のことを言うと、そういう説明がなされますけれども、それがご利益です。必ずしも自分の利益やメリットになるものがご利益ではありません。ただし、そのご利益も問題があると思います。結局はそのご利益だって、仏様の正しい教えを守り、そして一生懸命善行をする。人のためになることを犠牲的に行う。でも、その仏様も結局は人の造ったものです。実際にその仏様というのは仏陀のことです、釈尊のことです。釈尊は自分の葬式すらしなかったんです。弟子たちにもさせなかったんです。釈尊は結婚していましたが、子供もいませんでしたが、でも「我が道を行く。」と言って、悟りを開くために、煩惱から解放されるために、平気で妻子を捨てた者です。ありとあらゆる欲から遠ざかるために、肉食も断ちました。妻帯もやめました。でも、今の仏教はどうでしょうか。皆結婚しています。酒も飲んでます。肉も食べています。後の時代の人たちが、自分たちに都合の良いように仏様を作り上げ、仏の教えを編んでしまったのであります。その教えに従えばご利益があるというのは、実にナンセンスな話であります。いずれにしても、本来ご利益というのは、自分のためだけのものではないということは、心にどこか留めておいて頂きたいと思えますけれども、でもそれすらも実は、結局とどの詰まるところは、回り回って自分のためであると。ですから、いくら言葉を繕ったところで、結局は最後は自分しか残らないわけです。完全に自分の願いだけで、仏様とか所謂神様の願いというのは、そこには含まれていないわけです。でも、本当の神を拜むという事は、本物の神礼拝というのは、全く違います。それは私たちの願いではなくて、むしろ神の願い、それを最優先するものであります。私たちの願いが叶わなくても神の願いさえ叶えば、それで良いんだと。それがベストである。ですから、たとえ自分の祈りが通じなくても、平安があるわけです。自分の思い通りに事が進まなくても、安心出来るわけです。却って感謝出来るわけです。「この願いは叶わなかった。この祈りは応えてもらえなかった。」ということは、どういうことか。それは、「その祈り以上のものを神様が計画されている。楽しみだ。ワクワクします。」いちいちもってガッカリする必要はないわけです。目に見えるところを見れば、私たちは失望したり、絶望するかもしれませんが、神は目に見えない方として目に見えないところで生きて働いておられますから。また未来のことすらもう見ておられますから。今だけを見て私たちはガッカリするかもしれませんが、でも、神は未来も見ておられます。そして私たちが見えていないところも見ておられるわけですから、そのような神に全幅の信頼を置くんです。神こそが主権者です。だから神なんです。主権者ということは、思うままにしている存在です。でも、偶像礼拝をする者たちは、自分たちを主権者とします。自分たちの思いが通るように、欲しいままに、心の欲望のままに振る舞う。それが偶像礼拝であります。ですから、これも言い換えれば**自分礼拝**です。**自己礼拝**です。自分の願いを通そうとする。自分がまるで主であるかのように振る舞う。それが偶像礼拝であります。ですから、最後には自分しか残らないのであります。神なんて全く名ばかりで、お飾りで、結局は自分が神なわけです。自分の願いを押し付け、神の願いなんかどうだっていい。完全に無視して、そして押し付けて「賽銭してやっているだろう。こんなにも拜んでやっているだろう。だから言うことを聞けよ。」と、神を操るとするわけです。

でも、本物の神様は人間に操られるようなお方ではありません。本物の神は目に見えませんが、でも確かにおられる方です。生きておられる方、人格を持っている方。この方は全知全能の神であり、主の主であり、王の王ですから、主権者であり人格者であります。目に見えないものが皆本物の神とは勿論言えません。イスラム教でも「アラ

一の神が目に見えないただ 1 人の神だ。」と言いますけれども、でも、アラーにはハッキリ言って人格なるものはありません。すべてアラーは、運命論として、そこにはアラーの人格が反映されるような決め方はありません。「なるようになる。それはアラーの思し召しませ。」

でも、私たちの信じている神は人格を持っている神ですから、主権者でありながらも神は、そのご人格に基づいて行動される方です。ですから、その人格は皆さんも知っている通り、『神は愛です。』と言われていています。愛に基づいて神は行動されるのであります。どんなことがあっても私たちは神に愛されています。これについてはローマ 8 章にハッキリ書かれています。どんなことがあってもキリスト・イエスにある神の愛から私たちを引き離すものはないと。何一つないと。だから、どんなことがあっても「私は神様に愛されている。」どれほど愛しているのかは、もうハッキリしています。ひとり子イエス・キリストを与えるほどに、これ以上ない愛をもって愛されているわけですから、その愛に基づいて神様が計画されたり、神様が決めたり、許されたりしているならば、私たちは安心出来るわけです。でも、その愛が分からなければ、ただの運命論です。「あっ、仕方がない。これが現実だから。なるようにしかならない。意味も分からないし、ただ受け入れるしかない。諦めるしかない。」でも、私たちの神様は私たちが愛して止まない神様ですから、期待出来るわけです。今、出来なくても、いつか出来るようになるかもしれないし、今、駄目でも、いつか良いようになるかもしれないし。そして、逆に祈りに応えてもらえなかったことが、後になって「本当にありがたかった。これが下手に自分の願い通りになっていたら、とんでもない結果になっていただろう。良かった。」と。「祈りに応えてもらえなくて良かった。こうならなくて良かった。自分の願望通りにことが進まなくて本当に良かった。」と、そのように思える日も遅かれ早かれやって来るということも知って、私たちは希望を持つのであります。分からないままではあります。いつか分かる日がやって来ます。そして 1 つだけ分かっていることが予めあります。それは、何度も伝えている通り、神は私たちが愛しておられるということです。この愛から誰も引き離されないわけです。何があってもあなたは神に愛されています。この事実 1 点だけで私たちはどんな事でも乗り越えていけます。神に愛されているかどうか分からなければ、私たちは何かある度に疑いますし、恐れますし、またパニくるわけです。「でも、何があっても神だけは私を愛しておられる。どんなことがあっても、神の愛は変わらない。たとえ神に背いても、たとえ私が神から離れても、神は私を愛している。見捨てない。いつまでも共に居てくださる。」それだけで私たちは生きていけますし、そこに希望を見出すことが出来るわけです。

偶像礼拝には、そのような希望は全く見出すことはできません。その偶像、それぞれ目に見えるものは多分持っていないと思いますが、目に見えないものはもしかしたら沢山持っているかもしれません。そのことを聖霊が、今、探ってくれるように願いたいと思います。あなたの偶像は何であるのか。週報の中にもそれらの偶像を見分けるいろいろな方法が、分かりやすい方法が記されています。その方法を試してみてください。いろんな試し方が、いろんな見極め方があるわけですが、偶像はあなたの願いであると。それが、目に見えないものが具現化したものだと言いましたから、あなたが今一番願っていること、それは偶像になり得るんです。それにこだわり続けるならば。別にその願いは叶わなくてもいいと思うならば、手放せるんだったら、その願いは健全です。「でも、どうしてもこれだけは。これだけは通したい。これだけは捨てられない。これがなければ生きていけない。」そういうものは全部偶像です。その事実、そのためにあなたは一番努力している、一番時間をかけている、一番お金をかけている、であるならばそれはあなたの偶像に十分なり得るものだということです。「いつでも捨てられます。タバコなんか、いつでも捨てられますよ。いつでもやめられますよ。」と言う人ほどやめられないんです。その人にとってそれは偶像です。神は悲しんでいます。私たちが頼りにすべきものがあるのに。あなたの子供が本来あなたを頼るべきところを、あなたに頼らず他のものにばかり、他の人にばかり頼っていたらどう思うでしょうか。あなたは心から子供たちを愛しています。にもかかわらず、その子供たちはあなたの愛に全く応えようとせず、通りすがりの人たちに愛を求めようとします。皮肉なことです。偶像礼拝というのはそのようにして真の神の心を痛めるものでもあります。そして、そのままでは神の国を相続出来ない者となってしまいますから、それは忌み嫌うべき罪でもあります。

そして、それらは常に悪霊が働いて、私たちの周りに誘惑となって置かれております。クリスチャンでも例外では

ありません。その願いは全て悪魔的なものばかりとは言いません。退廃的なものばかりとは言いません。それは、時には非常に良いもの、社会に役立つもの、教会にも貢献出来るもの、そういうものもまた偶像になり得るということです。神以外のものであなたが頼りにしているもの、神以外のものであなたが神以上に愛するものは、すべて偶像になりうるということです。人であろうと、物であろうと、目に見えないものでであろうと、全部偶像になるそういうポテンシャルが、可能性があるということです。

それらをどう処理すべきか、ということもまた週報には記していますが、ただ一番分かりやすくて確実なのは、真の神を礼拝することです。真の神をもっと知って、そして真の神を礼拝すること。知れば知るだけその神を愛するようになる。その神を誉め讃えるようになるということも分かって頂きたいと思います。神様のことを知らないから、だから他に満足を求めて偶像礼拝に走っていくのであります。ですから、クリスチャンでも偶像礼拝をしている人たちに多く見られるのは、ろくに神を知ろうともしない、聖書も真剣に読もうともしない、神を礼拝しようとしません。「日曜日は礼拝に来ていますよ。」習慣的には聖書も開くかもしれません。食前には機械的にお祈りするかもしれません。それでクリスチャン生活を送っているつもり、と言うかもしれませんが、でも実際にはそれらよりも大事にしているものがある。夢中になっているものがある。躍起になっているものがある。結局は教会生活なんて形だけ。本当は心の中に秘めた偶像があって、それらの虜とりこになっている。ですから、是非それらから解放されるためにも、それら以上に力のあるもの、それら以上に慕うべきもの、それら以上に優れたもの、それら以上に美しいもの、力のあるものである神様に目を向けない限りは、いつまでもあなたの心は偶像に縛られたままで、そして偶像礼拝の罪から解放される事はありません。

これでそろそろ終わりにしたいと思うのですが、私たちが今、心の中に願うものをもう一度一人一人に問いかけてしたいと思います。もしかしたら、偶像化する一歩手前まで来ているかも知れません。まだそれは偶像になっていないかも知れませんが、このままではそれが偶像になってしまうというものがあるかも知れませんし、もう完全に偶像化してしまっているもので、心の奥底にいつまでも秘めている。そういう人もあるかも知れません。ポケットに入っている、家のどこかにしまっている。週報にも書きましたけれども、「誰も見ていないところですが、あなたの宗教である」と。誰も見ていないところのことです。今は人が見えていますから、あなたは聖書も開き、祈り、賛美し、礼拝しているかも知れません。でも、人が見ていなかったらあなたは何をしますか。それがあなたの宗教です。人が見ていなければ夜な夜なインターネットでポルノを見ます。それがあなたの宗教です。人が見ていなければプカプカ煙草を吸います。酒をあおります。それがあなたの宗教です。人が見てなければ、でも、神は見ているということを全然分かっていないわけです。偶像礼拝とはそういうものだと言いました。まともに考えれば分かること、理性があれば分かること。なのに、それが出来なくなってしまう。それは、その背後に悪霊の力が働いているからだということも、指摘しました。それが偶像礼拝の恐ろしさです。あなたを無能化するんです。何も考えられないようになってしまうのです。体に悪いと分かっても、他人に迷惑だと分かっても。それが偶像礼拝です。「別に減るもんじゃないし、何が悪いんだ。」と開き直すわけです。そうやって見えなくしてしまうもの、分からなくしてしまうもの、聞く耳を持たなくさせてしまうもの、不自由にしてしまうもの、縛り付けるもの、身動き取れなくしてしまうもの、がんじがらめにしてしまうもの、それが偶像礼拝です。やめられなくなるんです。自由に闊歩かつぽ出来なくなるわけです。今はどの辺りにあるのでしょうか。完全に偶像の前に平伏ひれふすところまで行ってしまうのでしょうか、所謂依存症とか。それとも、まだその手前ぐらいで危うげな、怪しい、そういうところにあるのでしょうか。クリスチャンでも偶像礼拝に陥るということをもう一度覚えて頂いて、そしてクリスチャンではない人たちは偶像礼拝を正当化して何の疑いもなく「それを生活の一部。これは伝統、これは文化だ。何が悪いんだ。日本人だから当然だ。」と言うかも知れません。でも、彼らも目が開かれる必要があるということを今日伝えましたので、皆さんがまず偶像礼拝から解放された上で、本当の神を礼拝する喜びに満たされた上で、これら目に見える、若しくは目に見えない偶像に縛りつけられてしまっている偶像礼拝者たちに是非伝えて頂きたいと思います。この自由を、この解放感を。そして同時に憤りも感じて欲しいと思います。彼らはそのままでは滅んでしまうわけです。「自分さえ救われていればそれで良い。」とは言いません。それでは御利益です。本当の御

利益は他人の利益のことも考えるわけです。「この人を救いたい。この人がイエス・キリストを信じて天国に行けるように。」ですから、その天国を阻んでいるものを私たちは見て、憤るわけです。それらはあつてはいけないもの。そしてハッキリとパウロのようにストレートに語るものでありたいと思います。ただその罪を指摘するだけではなくて、そこから解放される喜び。本物の神を知る喜び。それを併せて伝えなければ、代わりになるものがなければ、彼らはまた別の偶像を探しまわるわけです、探し続けるわけです。折角タバコをやめられても、次はパチンコだとか。次はパチンコをやめても、他のもの、他の趣味とか。そうしたものに、満たされない限りは他のものを探し回るわけです。ただの禁欲主義ではやめられないわけです。ただの律法主義ではやめられないわけです。本物を知らなければ、本物に出会うことがなければ、この罪から解放される事は決してありません。私たちの心を本当に満たすことができるのは、私たちを造られたお方、私たちを愛して止まない方、そして私たちを永遠の滅びから救ってくださった救い主以外にはないということ。分かっているとは思いますが、その方を伝えなければいけない。それが私たちの役割であります。では、今日はこれで終わりたいと思います。